

欧米派遣小学師範学科取調員の研究 (三)

平 田 宗 史

(第四部教育科)

(平成3年9月9日受理)

(七) 高嶺秀夫の留学生活

高嶺秀夫は、1875年8月16日、同行の開成学校留学生達と別れ、欧米派遣小学師範学科取調員であった伊沢修二と神津専三郎とともに、ニューヨークからニューヨーク州首府オルバニーへと向った。そして、ここで2泊した後、高嶺は、オンタリオ湖畔のオスウィーゴへ、伊沢は、その反対方向の大西洋沿岸に近いブリッジウォーターへと向った。

「翌十六日、同行の人に別を告げ、伊沢氏・神津氏と小生と三人蒸気車にて新約克出立、ホドソン河の左岸に傍ふて百十余里を走り、夜第九時オルバニーと申す新約克州の都に着し、爰にて伊沢・神津の二君に別れ、此に三泊して用事を并じ第十九日オスウィーゴ港に着致し申候」彼は、翌日、オスウィーゴ師範学校校長シェルドン (Sheldon, Edward Austin 1823~1897) を訪問した。

「先生、オスウィーゴ到着の翌日、シェルドン氏を訪ひ、モルレー氏 (米国人にして当時我が文部省の雇たり) 及ニューヨーク州ギルモル氏の添書を出し、我が政府が己を米国に留学せしむる所以と留学校として本校を選びたる次第を陳述せり。」

しかし、高嶺の訪問は、シェルドンにとっては、思い掛けないことであつたと、高嶺が、留学中、大変世話になったクリュージイ (Krüsi, Johann Heinrich Hermann 1817~1903) は、彼の『回想録』⁽³⁾の中で記している。

シェルドンに面会した「その夜はシェルドンの宅に一泊し翌二十一日同氏の周旋にてプロヘッソルクルージーと申す学者の宅に下宿致し大安堵仕候」⁽⁴⁾と、8月24日附の弟秀三郎への便りから推察されるように、生涯父と呼ぶようになるクリュージイ宅へ下宿することとなった。

オスウィーゴに到着した翌日の8月20日、校長に面会したその夜、校長シェルドン宅で一泊するのであるが、若い高嶺は、早速、カルチャショッ

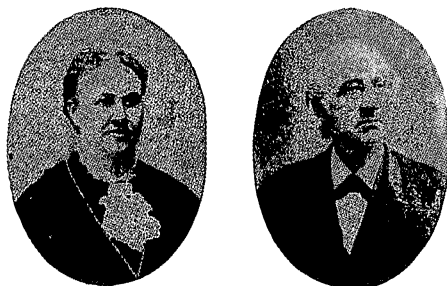


写真 (七一①) 高嶺が留学中、大変お世話になったクリュージイ夫妻



写真 (七一②) 高嶺が留学中寄寓したクリュージイの居宅

クを受ける。

「シェルドン氏の宅は、遙に塵埃を脱し、独り樹林の中に美宅を営し、西北のオンタリオの大湖を擁して、其の風景実に人の心を悦ばしむ。余初めて其の家に近づきしとき、未其の主人を見ずして、既に其の必ず高尚清潔の君子なることを知る。其の人を見るに及び、余の推察に暗合せるを喜ぶ。同氏家族八人、母・妻・女子四人・男子一人なり。余が萬里の孤客にして無聊なるを慰めんため、四人の婦人或はクロッカーの遊をなし、或はジャックスチッキの戯をなして、最も親切なれば、余も共に戯れて慰みたり。

米国の婦人は、大概多少の教育を受け、且自由の風に浴して、母、娘を抑し姉、妹を制するの悪弊なく、各自由の気風を顕はし自然の性を伸べ、最も貴ぶべき有様なり」

高嶺は、シェルドン宅とその周囲の景色の美しさに驚嘆するとともに、シェルドンの家族関係、特に、女性の自由潤達さに感銘を受けたのである。帰国後、1910（明治43）年に亡くなるまでの大部分、東京女子高等師範学校の教頭および校長として、日本の女子教育を担当することとなった時、高嶺の感銘は、生かされたものと推察される。

8月20日にシェルドン宅に泊り、翌21日から、クリュージイ宅に下宿することになった高嶺は、3日後の8月24日に、後に米国留学し、クリュージイにお世話になる弟秀三郎への前掲の書信の中で、アメリカ文化の他の側面をつぎのように記している。

「食事は朝夕三度にて、朝七時半、昼一時、夕七時比なり、御馳走の多きは夕食に御座候。食物はポテト、パン、牛肉、其の他種々の野菜及牛乳、茶、コーヒーの類にて、日本にては上等、並米利加にては中等の食物に御座候。」

日本に居る時には、三度の食事也十分にありつかなかったと推察される高嶺にとっては、三度の食事にありつけ、その食物の豊富さに驚かされたのである。

1875年9月初旬に、高嶺は、オスウィーゴ師範学校へ入学することとなった。そのオスウィーゴ師範学校は、当時、アメリカ合衆国の中で最も代表的な師範学校の一つであった。高嶺が留学した頃までのオスウィーゴ師範学校の歴史を略述してみよう。⁽⁶⁾オスウィーゴ師範学校の歴史は、その創設から1897年の死去するに至るまで、その中心となったシェルドンを抜きにしては語れない。シェルドンは、1823年10月4日、ニューヨーク州ジェネシー郡のペリー・センター（Perry Center）の近くで生まれた。両親は、ニュー・イングランド出身の敬虔な清教徒であり、教育熱心であった。彼は、幼い時、10年間、田舎の学区学校（local district school）に通ったが、余り真面目な児童ではなかった、しかし、17才の時、地域のセンターとなっていたペリー・センター（Perry Center）に、チャールス・ハンチントン（Charles Huntington）が来て、私立アカデミー（Private academy）を開設した。ハンチントンは、真面目で、熱心な、若いカレッジの卒業生であった。私立アカデミイに入学したシェルドンは、10年間も通った学区学校時代と異なり、ハンチントンとの

出会いは、彼の心を一変させた。彼は、ギリシャ語、ラテン語、代数、幾何学などを熱心に学び、カレッジ進学準備をした。21歳となった1844年の秋、彼は、ハミルトンカレッジに進学し、正規の古典語コースを修了した後、弁護士になる準備をする志をもっていた。彼が指導を受けた教授達の言によると、「仕事において勤勉で、有能である」「人格や学識においてばかりでなく、規則正しく、そして、学究的習慣において大変秀れている」「知的で、能力があり、大変高潔で、そして、暖かい心の青年である」など、在学中の彼の印象を語っている。しかし、彼は、健康を害し、3年生の終り頃、ハミルトンカレッジを去らなければならなかった。

シェルドンは、ニューバーグの著名な園芸家であるダウンング（Downing Charles）の所を訪問していた時、アレン（Allen, J. W. P.）に出会った。彼は、シェルドンに、オスウィーゴに来て、育種苗事業を手伝ってくれるよう懇望した。その要望に応じて、シェルドンは、1847年9月8日に、オスウィーゴに到着した。そして、育種苗事業に参加したが、この事業は、3ヶ月足らずで倒産した。

シェルドンは、オスウィーゴに来ると、事業に精を出すとともに、教会の活動にも参加していた。その活動の中で、彼は、貧困児および孤児の教育に関心を抱くようになった。したがって、ロンドンやボストンに既に設立されている、孤児には家庭を、貧困児には無償の学校教育をというスローガンに掲げた『孤児及び無償学校協会』

（Orphan and Free School Association）の結成を、彼は、彼の友人達とともに、考えた。彼等の熱意と努力の結果、孤児および無償学校が設立されることとなったが、誰れが校長になるかが問題となった。オーバン神学校進学を心に決めていたシェルドンは、周囲の人々の強力な説得によって、その校長となることとなった。そして、その学校は、1849年1月14日、開校することとなった。しかし、この学校も、シェルドンの努力にかかわらず、半年も経たない中に、閉校しなければならなくなった。閉校しなければならなかったが、シェルドンの教育の情熱は衰えることはなかった。その後、彼は、孤児院の設立と無償学年制学校の組織化へ情熱を傾けた。しかし、これも、志の通りには進まず、翌年の1850年、シュラキウスで学校教師をしていた妻と一緒に、私立学校を経営することとなった、この学校経営もうまく行かず、1851年、妻が以前教師をしていたシュラキウス

で、公立学校の教育長の地位についた。ここでの2年間の活動は、目覚しいものがあつた。彼は、下級学校 (the lower schools) を統合し、学年別編成をしたり、夜間学校を開設したり、学校図書館を設置したり、市の学校年報を発刊したり、その他、種々の教育改革を実施したのである。

1853年5月11日、オスウィーゴー市にも、教育委員会が設立されることとなった。そして、学識、識見、行政能力に優れていたシェルドンは、その初代教育長に招かれた。まさに、30才になろうとしたシェルドンは、精力的に、オスウィーゴーの教育改革に乗り出したのである。

まず、彼が取り組んだのは、学区制の改革と学校制度の組織化、体系化であつた。オスウィーゴー市を12の初級学校区に分け、それぞれの学区の児童数を殆んど同数とした。初級学校区には、5歳から7歳までの児童が入学する3ヵ年の初級学校を1校設置することとした。その上、4つの中級学校区を設け、それぞれ学校区に初級学校3ヵ年を修了した8歳から10歳までの児童を入学させる3ヵ年の中級学校を設置することとした。さらに、中級学校の上に、11歳から13歳までの生徒が入学する3ヵ年の上級学校が、オスウィーゴー河をはさんだ両地区各1校、すなわち、2校の上級学校が設置されることとなった。教育長に就任して4ヵ月経った9月には、これが実現され、30年間、変ることがなかった。以上のような教育改革の外に、彼は、早春から初冬にかけて湖上で働き、12月から4月まで陸上でぶらぶらしている若者や子ども達のために、間に合わせで、無学年制の算数学校を設置したり、全日制の男女共学校の夜間学校を開設したりするなど、彼は、教育改革に鋭意着手した。

学区制および学校制度の改革を着々と進める一方、彼は、学校教育を担う教師の研習を重視し、シェルドンの開催する週末会合 (土曜日午前9時~12時) の教師の出席を義務づけた。そこで、教師たちは、日課を復習し、教科内容および教授法を相互に検討し、教師個人個人の力量を高めたのである。

しかし、シェルドンは、これに満足せず、当時、一般の教師が行っていた教授法に疑念を抱いたのである。すなわち、当時主流を占めていた教授法は、児童を多量の頁を記憶する暗記学習者、教師を児童の暗唱を聞き取り、そして評価、報告を行う機械とみなす、記憶中心主義、暗記中心主義の教授法であつた。それに疑念を抱いたシェルドンは、模索の中で、1857年10月、対岸都市であるカ

ナダのトロントを訪問した。その時、彼の疑念を解いてくれる出来事に出会った。それは、イギリスのロンドンにある『本国及び植民地教員養成学校』(Home and Colonial Training School) で使用されている教具との出会いであつた。彼は、その一部を持って帰るとともに、ロンドンの『本国及び植民地幼児・児童学校協会』(Home and Colonial Infant and Juvenile School Society) から、多数の教具を取り寄せた。その協会は、1836年に設立され、ベスタロッタの教授法を信奉し、その原理の下に、教育経営を行なつていた。

シェルドンは、早速、ベスタロッタ主義に基づき、教育過程と教授法の改善を図ろうとした。しかし、それは、シェルドンの意図通りには進まなかった。その原因の一つは、新課程を十分に理解する教師の欠如であつた。そのため、彼は、小学校教員養成のための市立教員養成学校 (City Training School) の設立を決意し、教員養成学校設立準備委員会は、1860年11月1日、オスウィーゴー市教育委員会に対して、設立決議案を提出し、承認された。その設立にあたって一番問題なのは、新教授法をよく理解し、指導出来るすぐれた教師を得ることであつた。

シェルドンは、教授養成学校設立準備委員会の決議事項に基づいて、イギリスのロンドンにある『本国及び植民地学校協会』長あて、教師派遣を依頼した。協会は、ジョーンズ (Jones, Margaret E. M.) 女史を、高額の給与条件を示し、推薦して来た。オスウィーゴー教育委員会は、女史の招聘に躊躇したが、シェルドンの行政能力によって、彼女が招かれることとなった。そして、彼女は、1861年4月、オスウィーゴーに着任した。彼女は、1824年頃、イギリスのロンドンのボンド街で生まれ、幼少の頃から学問好きであつた。4才の時には、読み、書きが出来、12才で、仏、独の両語を理解し、読書好きの少女であつたので、彼女の友人であるヴァルピイ (Valpy, John) によって、ロンドンにある『本国及び植民地カレッジ』(the Home and Colonial College) に進学するよう薦められた。このカレッジに入学すると、彼女は、そこで教えられるすべてのものが楽しく、特に、精神科学と教育理論に感心を抱いた。学業成績が優秀であつたので、推薦されてホワイトランドの教員養成学校 (White land's Training School) の教師となった。しかし、そこには、1年足らずしかなく、本国及び植民地カレッジの経営する学校で、オスウィーゴーに招聘されるまで、教鞭をとつていた。彼女は、18年間の教職経験があつたので

ある。⁽⁷⁾

ジョーンズが着任し、学校は、5月1日に開校された。校舎は、既設の小学校の一部が使用され、そして、初級部・中級部の児童数200名からなるその小学校は練習学校に転用された。現職の教師のために、午後の授業を短縮し、午後3時30分から、毎日の授業が行なわれ、土曜日の午前中も、学習会が行なわれたのである。彼女の教育の特徴は、ペスタロッチ原理の実際の適用にあったと言われ、実物教授と教育実習を重視するものであった。これは、オスウィーゴ師範学校の伝統となり、1860年から1880年までの間、アメリカ合衆国教育界で最も話題となった出来事であった。その端緒となったのは、ジョーンズの指導が軌道に乗った1861年12月2日、シェルドンは、ジョーンズ指導の新教授法の検討とそのアメリカ合衆国全体への普及をねらって、アメリカ合衆国の代表的教育指導者に招請状を送ったことにある。翌1862年2月11日～13日の3日間、ジョーンズの指導による教授法が実演された。シェルドンのこの企みは成功し、全米に、オスウィーゴの教育改革の試みは周知されることとなった。余りもの反響に、ジョーンズの1年間の滞在予定は、5ヵ月間延長され、彼女は、1862年9月、帰国したのである。

彼女が去るにあたって、誰れを後任とするかが問題となったが、ジョーンズは、シェルドンを校長とすること、そして、教授法の実質的指導者として、かつて同僚であったクリュージの招聘を要望した。クリュージは、スイスのイヴェルドンで、1817年6月24日、ペスタロッチのよき協力者で、理解者であったクリュージ (Kriisi, Herman 1775～1844) を父として生まれた。彼は、先ず、父が校長をしていたガイスの師範学校に学んだ。この学校は、イギリス、アメリカからも多くの参観人があり、のち、アメリカでペスタロッチ運動が盛んになる基礎となった学校である。この学校で学んだ後、彼は、またペスタロッチのよき協力者であったブロッホマン (Blochmann, Karl 1786～1855) の経営するドレスデンの師範学校で学び、そこを卒業後、ドイツ各地の師範学校などを1年間視察して帰国した。1841年から46年まで、父の下でガイスの師範学校教師をし、1846年、イギリスに渡り、ペスタロッチ主義者メイヨー (Mayo, Charles 1792～1846) の経営する学校の教師となった。また、その年の終りに、ジョーンズもいたことのある『本国及び植民地学校協会』の管理する師範学校に転任した。ここに1847年から1852年まで勤め、一旦、スイスに帰国

したが、1年後アメリカ合衆国に渡航した。そして、ラッセル (Russell, William 1798～1873) が、1853年、マサチューセッツ州ランカスターに創設したニューイングランド師範学校 (New England Normal Institute) の教師となった。⁽⁸⁾

以上のようなペスタロッチ主義教育について豊富な知識と経験を有するクリュージが、ジョーンズの推薦とシェルドンの強力な要請とによって、1862年9月、着任した。

開校2年目を迎えた教員養成学校は、校舎と練習学校を移転した。教師は男子3名、女子3名、合計6名であった。その6名のうち、教員と練習学校長を勤めたファネル (Funnell, A. P.) 以外は、他の職務との兼務であった。生徒として、現職の教師約20人が入学したと言う。その授業は、教授法を教えることを主としていた。

この年、オスウィーゴ市教育委員会は、教員養成学校の充実発展を期して、州議会に学校補助金を請願した。1865年度から、学校補助金が交付された。これを機に、オスウィーゴは、同校の州立移管を期して、施設・設備の整備充実を図った。セネカ通りにあり、かつて一部を利用し、シェルドンが私立学校を経営した合衆国ホテル (United States Hotel) を買収し、それを改築整備し、教育器具を備えたのである。

1866年4月7日には、ニュー・ヨーク州の教員養成史上記念すべき『一般師範学校法』 (General Normal School Act) が州議会を通過した。これによって、州内に六校の州立師範学校が設立されることになり、オスウィーゴの教員養成学校は、これを機に、市立から州立に移管された。そして、その名称も、オスウィーゴ師範・練習学校 (Oswego Normal and Training School) と改称された。さらに、学科課程も、大巾に改定されたのである。これまで、学科課程は、1年制であり、教授法を中心とした教職専門教育を中心とするものであった。これで、現職教師が大部分入学する場合は、それでよいとしても、教師としての基礎教育の不足している者が入学して来るようになると、この学科課程では、対応出来なくなった。したがって、州立師範学校への昇格を機に新しい学科課程が制定されたのである。それは、3コースに分れている。

(1) 初級英語コース

このコースは、修学年限1年半 (1869年8月から2年制に延長) で、1年の時、一般教科、2年次、教職教養、各科教授法などが教えられ、そして、20週の教育実習を行うので

ある。

(2) 上級英語コース

このコースは、修業年限3年で、1年の時、初級英語コースと同じ一般教科、2年時に、より高度のハイスクール程度の一般教科、3年次に、教職教養、各科教授法などが教えられ、そして、20週の実習を行うのである。

(3) 古典語コース

このコースは、修業年限4年で、上級英語コースと同じ教科の上に、ラテン語とギリシャ語あるいは現代語(フランス語あるいは、ドイツ語)を履修し、そして、教育実習を行う(初めは必修ではなかった。)のである。

以上のように、3コースが設置され、学科課程の整備を行うとともに、練習学校に3ヵ年の初級部だけでなく、1865年には、3ヵ年の中級部も設置された。次第に名実ともに、オスウィーゴー師範学校は、充実されてきた。⁽⁹⁾

オスウィーゴー師範学校の名声は、高嶺秀夫が留学して来た1875年8月頃には、全米に広がっていた。彼が留学当時のオスウィーゴー師範学校の状況を考察してみよう。

高嶺が留学していた頃のオスウィーゴー師範学校の建物は写真(七-③)の通りである。この建物は、州立移管にともなう、合衆国ホテルを買収して改造されたものである。



写真(七-③) オスウィーゴー師範学校の建物
(1866年～1879年)

そして、1879年まで使用されたものである。すなわち、高嶺が帰国する1878年までは、この建物が校舎として使用されたのである。

教授陣は、表(七-①)の通りである。クリュージが着任した頃の1862年頃の教師は、6名で、その中の1人を除いて、すべてが、他の職務を兼務していたのが、それから13年経った1875年の教授陣は、14名である。校長シェルドンは、もう教育長を兼務していない。そして、教授陣をみると、かなりの充実が窺われる。

『米国紐育州オスウィーゴー師範学校一覧表』⁽¹⁰⁾ (大塚綏次郎譯)によると、「コノ学校設立ノ趣意ハ州内公学校ノ爲メ適當ノ教師ヲ養成スルニアリ」とあり、生徒の定員は、「各区議事院ニ派遣スル代議員ニ二倍ノ生徒ヲコノ校ニ入学セシムルヲ得ヘシ」という原則を定めていた。

入学資格は、「体質健康ニシテ品行正シク通常ノ才能ヲ有シ年齢十六年以上ノ者ニシテ読方綴字地理書算術(平方立方根ニ至ル)ノ試験ヲ経單文ヲ解剖シ字類ヲ辨析シ得ル者ニアラセハ入学ヲ許サス」とし、「学校委員府学監ノ薦挙ニ当リ試験ヲ受ケ其才幹入学ニ適當スル者ハ州ノ公学監督之ヲ命ス」と、上記の入学資格を有する者の中から、学校委員府学監から推薦され、試験に合格した者が入学出来た。入学を許可された生徒は、「授業料ハ生徒ニ課セス教科書ハ学校ヨリ之ヲ給ス」「生徒来校ノ路費ハ全一期在校スルヲ持テ之ヲ支給スヘシ」という特典が与えられた。

そして、入学した生徒で、「オスウィーゴーニ居住セサル女生徒ハ必ス寄宿スヘシ」と定め、約120名が寄宿出来る寄宿舎が附設されていた。学年は、「学年ヲ分テ二期各二十週トス秋期ハ九月第一水曜日ニ始リ春期ハ二月第二水曜日ニ始ル期中一週ノ休暇アリ」と定めてある。

生徒の進むべき、コースは予科(Elementary English)、本科(Advanced English)、経科(Classical)の3つに分けられた。高嶺の在籍していた時の生徒数は、「同学年の初級英語コースは45名(男子4、女子41)、上級英語コースは13名(男子2、女子11)であって、古典語コースは6名(男子3、女子3)、総計64名(男子9、女子55)であった」と言う。

予科(初級英語)コースは2年制であり、本科(上級英語)コースは3年制、経科(古典語)コースは4年制である。そして、それぞれの学科課程表は、表(七-②)、表(七-③)、表(七-④)の通りである。

高嶺が履修したコースは、2年制の予科コースである。同じ時期、伊沢修二は、ブリッジウォーター師範学校で学んでいたが、彼が履修した学科課程表は、表(六-⑤)である。その表と高嶺が履修した学科課程表(七-②)とを比較してみよう。

ブリッジウォーター師範学校の学科課程表は、一般教科を重視し、教職科目は、第2年次の後期に、わずかに教えられている程度である。これに対し、オスウィーゴー師範学校の予科学科課程表は、第1年次において、小学校の一般教科を教え、

表（七-①）オスウィーゴ師範学校教授陣一覧（1875年）

	氏 名	担 当 教 科	学 位
1	エドワルド, セルドン 長 (E. A. Sheldon)	教授法教師	理学博士兼芸術学士
2	ナザジュール, テートリュー (Nathaniel T. True)	博物学教師	医学博士兼芸術学士
3	アイサック, ビー, ポーチャー (I. B. Poucher)	算術、代数及数術教授法教師	芸術学士
4	ヘルマン, クルシ (Hermar Krüsi)	幾何学、教育理学、教育史、独逸及佛語 教師	芸術学士
5	マチルダ, エス, クーパー 女 (Matilda S. Cooper)	英文法、文法及物體示教教授法教師	
6	メリ, ヴワー, リー 女 (Mary V. Lee)	解剖、生理学、健全学、読方、体操、植 物学、地理学、読方、綴字、習字及図画、 自在模写教授法教師	医学博士
7	メリー, デー, セルドン 女 (Mary D. Sheldon)	羅甸語、希臘語、歴史、植物学教師	芸術得業士
8	ミスシス, ヘンリー, エッチ, ストレート 女 (Henry H. Straight)	英文学、作文、哲学、画学教師	
9	ヲルゲリヤ, エ, レスター 女 (Ordellia A. Lester)	修辭、作文、綴字、唱歌教師	
10	エラ, エム, ステワルト 女 (Ella M. Stewart)	附属小学校長	
11	イサベル, ローレンス 女 (Isabel Lawrence)	綴字、初歩附属小学校長	
12	マルサー, エ, キーラー 女 (Marther A. Keeler)	地理学教師兼中等附属小学 ^{クリチツキ} 副批評教師	
13	エス, アイダ, ウィルリヤムス 女 (S. Ida Williams)	初歩附属小学副批評教師	
14	セラ, ビー, スミッス	仮傭教師	

注 (1) 「米國紐育州オスウィーゴ師範学校一覧表」(大塚綏次郎譯) (『教育雑誌』第14号 明治9年9月2日 26~27頁) による。

(2) 氏名の () 内の英文名は、“Historical Sketches Relating to the First Quarter Century of the State Normal and Training School at Oswego, N.Y., 1888, 131” による。

(3) 上記の14名の中、10名の学歴などについてより詳細にまとめた村山英雄著『オスウィーゴ運動の研究』(風間書房) から、抜粋してみよう。

	名前 (学位を含む)	採用時の 年齢	学歴	教職歴	担当教科 と役職
1	シェルドン (Sheldon, E. A.) ハミルトン大学名誉文学 修士、ニュー・ヨーク州 大学区教育委員会名誉哲 学博士	28	ハミルトン大学 (3年中退) 1862 年度のオスウィー ゴー校の卒業	オスウィーゴーの貧民学 校、私立学校長、シラ キューズの教育長、1853 年から1869年にかけての オスウィーゴー教育長	1897年の死去に至 るまでオスウィー ゴー校の校長
3	ポーチャ (Poucher, I. B.) ハミルトン大学修士、シ ラキューズ大学名誉教育 学博士		1847年度のオルバ ニー州立師範学 校、ニュー・ヨー クの医学生	ニュー・ヨークのマー ヴィルの教師、オス ウィーゴー公立学校長	練習学校長、師範 学校長(シェルド ンの後任)、数学 担当
4	クリュンイ (Krüsi, H.) エール大学名誉文学修士	45	スイスのガイスの 師範学校、ドレス デン及びベルリン で研究 プロイセンの各師 範学校を訪問し研 究した	イギリス、チームのメイ ヨー学校の教師、本国及 び植民地学校の教師 マサチューセッツ州ラン カスター私立師範学校教 師、ニュー・ジャーシー 州トレントン州立師範学 校教師 マサチューセッツ州立教 育協会講師ニュー・ハン プシャー及びオハイオ各 州の教育協会の講師	数、形態、図画の 教授法 オスウィーゴー公 立学校の図画の指 導主事 哲学及び道徳哲学 を含む教育哲学 フランス語、ドイ ツ語の近代語部門 の長
5	クーパー (Cooper, M. S.)	22	ニュー・ヨーク州 ナイアックのハー ドキャスル学院 1856年度のオルバ ニー州立師範学校	オスウィーゴー公立学校	練習学校の批評教 師、言語と教授法、 生徒の奨学金及び 出席表などの事務、 寄宿舎の舎監
6	リー (Lee, M. V.)		ニュー・ブリテン のコネチカット師 範学校 1862年度のオス ウィーゴー市立教 員養成学校 ミシガン大学医学 部卒('74年)	ウエストフィールド、 ハートフォード、ミドル フィールド、ニュー・ブ リテン及びケンシントン 公立学校、アイオワ州ダ ブンボートの市立教員養 成学校長	生理学、読み方、 体操 読み方、植物、地 理及び形態に関す る教授法 外国留学の後、生 理学、動物学の教 師、動物学、植物学 及び人体に関する 教授法、体育主任
8	ストレイト (Straight, H. H.)	30	オーバーリン大学予 備校、オーバーリン 大学、文学士、コー ネル大学及びハー バード大学で研究	オハイオ州ジュニアアの 公立学校長ネブラスカ州 ベルーの州立師範学校長 ミゾリー師範学校教師	自然科学、練習学 校長 教育史及び教育哲 学
9	レスター (Lester, O. A.)		フルトンのフォー レイ神学校 1871年と73年のオ スウィーゴー校	学区学校と村落学校	練習学校中級部の 批評助手、後に修 辞学、作文、綴り 方及び唱歌担当
11	ローレンス (Lawrence, I.)	21	メイン州、ポート ランド・ハイ・ス クール 1874年度のオス ウィーゴー校	ポートランド学校	批評教師及び練習 学校の初級部の長
12	キーラー (Keeler, M.)		1874年度のオス ウィーゴー校	公立学校の教師	練習学校中級部の 批評助手、初級部 の長
13	ウィリアムズ (Williams, S. I.)		ウィードスポート・アカデミー 1872年度のオス ウィーゴー校		

表（七-②）オスウィーゴ師範学校予科学科課程表（和訳1875年、英文1870年）

予 科（1875年秋・冬学期）		Elementary English（1870）
年	第 一 期	算術 文典 地理書 讀方 綴字及臨時作文 畧画 習字 輕易體操 _{毎日}
	第 二 期	算術 文典及文章解剖 植物学 _{半期} 作文及修辭 米国史 _{半期} 生理学及動物学 唱歌 輕易體操 _{毎日}
	第 三 期	算術 文典及文章解剖 植物学 _{半期} 作文及修辭 米国史 _{半期} 生理学及動物学 唱歌 輕易體操 _{毎日}
年	第 一 期	教育理学及教育史 学校理財管理法及学校法 物體示教法及初歩学科教授法 辨論論文及撰擇讀方
	第 二 期	物體示教ハ物體、図畫、 形容 _及 大小輕重、色、聲、 地位、動物、植物、人身 及脩身學ヲ綜フ
	第 三 期	教育理学及教育史 学校理財管理法及学校法 物體示教法及初歩学科教授法 辨論論文及撰擇讀方
年	第 一 期	教育理学及教育史 学校理財管理法及学校法 物體示教法及初歩学科教授法 辨論論文及撰擇讀方
	第 二 期	教育理学及教育史 学校理財管理法及学校法 物體示教法及初歩学科教授法 辨論論文及撰擇讀方
	第 三 期	教育理学及教育史 学校理財管理法及学校法 物體示教法及初歩学科教授法 辨論論文及撰擇讀方

注（1）和訳の予科（1875年秋・冬学期）の学科課程表は、「米國紐育州オスウィーゴ師範學校一覽表」（大塚綏次郎譯）（『教育雑誌』第14号 明治9年9月2日 17-19頁）、Elementary English（1870年）は、市川純夫「オスウィーゴ・ノーマルスクールにおける教員養成カリキュラムの分析と考察」（『教育史学会紀要』第19集 63-64頁）による。

（2）1870年の教科は、1875年の教科に準じて並べかえた。

表(七-③) オスウィーゴ師範学校本科課程表(和訳1875年、英文1870年)

本科(1875年秋・冬学期)		Advanced English (1870)
第 一 年	豫科第一年ノ全科ニ於テ満足ナル試験ヲ經タル者ニアラサレハ此科ニ入ルヲ得ス	Same as First Year of Elementary English Course
	第 一 期 代数 遠景写法 幾何學 撰擇讀方 物理學 修辭 作文 辨論 輕易體操 <small>毎日</small>	Algebra Geometry Select Readings Rhetoric and English Literature (half term) Compositions Declamations Light Gymnastics Natural Philosophy General History Botany (half term)
	第 二 期 代数 萬国史 幾何學及三角法 記簿法 <small>(生徒ノ策ニ在ス)</small> 輕易體操 <small>毎日</small> 英語 作文 撰擇讀方 辨論	Algebra Geometry and Trigonometry Bookkeeping Light Gymnastics Compositions, and Declomations, Select Reaings Physical Geography Chemistry
	第 一 期 金石學 地質學 餘ハ豫科第二年ノ第一期ニ同シ	Same as the First Term of the Second Year of the Elementary English Course
第 二 年	第 一 期 修身學 地理学 <small>地形ノ半期</small> 高等學問ノ法 作文 附屬小學演習 測量 <small>半期ノ生徒ニ在ス</small>	Moral Philosophy Mineralogy and Geology Methods in High Studies Compositions Practice in Training School Light Gymnastics
	第 二 期	

注(1) 和訳の本科(1875年秋・冬学期)の学科課程表は、「米國紐育州オスウィーゴ師範學校一覽表」(大塚綏次郎譯)(『教育雜誌』第14号 明治9年9月2日 19~20頁)、Advanced English(1870年)は、市川純夫「オスウィーゴ・ノーマルスクールにおける教員養成カリキュラムの分析と考察」(『教育史学会紀要』第19集 63~65頁)による。

(2) 1870年の教科は、1875年の教科に準じて並べかえた。

表 (七-④) オスウィーゴ師範学校クラシカル経科学科課程表 (和訳1875年、英文1870年)

クラシカル 経 科 (1875年秋・冬学期)		Classical (1870)
	豫科第一年ノ全科ニ於テ満足ナル試験ヲ經タル者ニアラサレハ此科ニ入ルヲ得ス	Same as First Year of Elementary English course
第 一 年	第 一 期	代数 幾何學 輕易體操 _{毎日} 羅旬語 作文 辨論 撰擇讀方
	第 二 期	代数 萬国史 英文典 羅旬語 幾何學及三角法 作文 辨論及撰擇讀方 輕易體操 _{毎日}
	第 一 期	羅旬語 物理學 希臘或近代國語 輕易體操 _{毎日} 地理學 _{地形○半期} 作文 辨論及撰擇讀方
	第 二 期	羅旬語 化學 希臘或近代國語 修身學 輕易體操 _{毎日} 作文 辨論及撰擇讀方
第 三 年	第 一 期	羅旬語 教育理學 希臘或近代國語 物體示教法及豫科教授法 作文 辨論及撰擇讀方
	第 二 期	金石學及地質學 作文 高等學問ノ法 附屬小學演習

- 注 (1) 和訳の経科 (1875年秋・冬学期) の学科課程表は、米國紐育州オスウィーゴ師範学校一覽表 (大塚綾次郎譯) (『教育雜誌』 第14号 明治9年9月2日 21~23頁)、Classical (1870年) は、市川純夫「オスウィーゴ・ノーマルスクールにおける教員養成カリキュラムの分析と考察」(『教育史学会紀要』第19集 63~65頁) による。
- (2) 1870年の教科は、1875年の教科に準じて並べかえた。

第2年次の前期で、教職科目、特に実物教授法を授け、第2年次の後期で、練習小学校での教育実習を20週間実施するのである。言わば、ブリッジウォーター師範学校は、アカデミックな教科の教授を重視し、オスウィーコー師範学校は、教育実習を媒介にした教授技術の教授を重視したのである。高嶺が、どういう教科を学んだのかを検討してみよう。彼の留学中の2ヵ年半の学籍簿が、オスウィーコー大学に残っている。大部分のところは手書きなので、それを活字にすると、表(七-⑤)の通りである。

1875年9月に入学し、そして、1876年1月、秋学期を修了したが、その学期の成績を検討してみよう。欠席日数1、暗唱不足4、遅刻回数2、である。これらは、他の同級生のそれらと比較す

ると、かなり少ない。少ないのでは、最上位にある。受講した教科は、綴字(84)、習字(92)、線画(×)、体操(100)、作文(95)、読方(80)、唱歌(×)、算数(90)、文法(×)、修辞学(×)、生理学(98)、動物学(×)、植物学(99)、合衆国史(99)などである。×は、多分、受講しても、受験しなかった教科と思われるが、受験した教科の平均点は93点である。学生によって、受講した教科、または、受験した教科が異なるので単純に比較できないけれども、読方を除いて、かなりの良い成績である。読方の成績が他の学生と比べて、あまり良くないのは、日本人であるので、仕方のないことであろう。

1876年2月から6月までの春の学期は、欠席日数 $\frac{1}{2}$ 、暗唱不足4、遅刻回数1である。相変らず、

表(七-⑤) 高嶺秀夫のオスウィーコー師範学校時代の学籍簿(1876~1878)

January 25, 1876		June 27, 1876		January 30, 1877		July 3, 1877		January 29, 1878	
Days Absent	1	Days Absent	$\frac{1}{2}$	Days Absent	6	Days Absent	3	Days Absent	$12\frac{1}{2}$
Recitations Lost	4	Recitations Lost	4	Recitations Lost	34	Recitations Lost	11	Recitations Lost	6
Times Tardy	2	Times Tardy	1	Times Tardy	2	Times Tardy	1	Times Tardy	1
Spelling	84	Natural philosophy	×	Words Misspells in Essays Sketches & C.	3	Power of Questioning	77	Geometry, 1st 1 Lecture	×
Penmanship	92	Algebra	97	Geography Methods	89	Punctuality	100	Natural Philosophy	×
Linear Drawing	×	Geometry	×	Botany Methods	90	Power of Control	80	Ad. Rhetoric and Composition	×
Gymnastics	100	Vocal Music	×	Reading Methods	×	Ability to gain love & Respect of Pupils	85	Geology and Mineralogy	×
Composition	95	Grammar completed	90	Arithmetic Methods	76	Energy	83		
Reading	80	Rhetoric and composition	87	Number	87	Thoroughness	85		
Vocal Music	×	Zoology	94	Language	83	Neatness	100		
Arithmetic, completed	90	Adv. Rhetoric	×	School Economy	96	Self Possession and Ease of Manner	80		
Grammar, completed	×	Perspective Drawing	×	Phil. of Ed.	90	General Skill	78		
Rhetoric & Composition	×	Linear Drawing	97	Objects	×	Summary for Work	85		
Physiology	98			Animals	×	Words Misspells	4		
Zoology	×			Moral Instruction	×	Objects	88		
Botany	99			Color	80	Moral Instruction	94		
U. S. History	99			Essays	93	Animals	79		
				Size, Height & C.	×	Criticisms	90		
				Form Methods	×	Reading Methods	88		
				Inventive Drawing	×	Form Methods	83		
				Writing Methods	×	Size, Height, Sound, & C.	82		
				Perspective Drawing	92	D. Geometry	74		
				Vocal Music	EX	Chemistry	×		

君と一同ニウゼルシーのロングブレンチより新約克州のカッキル山等處々の海水浴處、深山避暑の地等を巡見し、前後二週間の日を送り、七月二十六日再びオスウィーゴに帰宅したりと雖も、ヒラデルヒヤにて二百枚余の翻訳を文部省より引き請たるに付一日も閑隙を得ず、毎日十二時間余勉強し、一日西洋五ページより八ページ程翻訳して八月二十二日迄に盡く落成し、学校の開業に至る迄の間二週日余の閑隙を得候に付、再度博覧會見物としてオスウィーゴを出立し、途中クルージイ氏の家内と一同名高きナイヤガラの瀧を見物し、同處に一泊して、翌日新約克州のバッハローに参り、米国の学者先生達の集會に出席して其評論等を聴聞し、同處にてクルージイ氏の家内と相別れ小生は再度ヒラデルヒヤに参り博覧會を見物したり。……………」

日下氏当地に着に相成り、新約克にて面会致し、皆様御無事の様子承り、且つ御茶噺に請取り難有存候。新約克にては、井上馨君に面会致し、同氏と種々雑談の上、其夜は同氏の宿に一泊して、翌日の午後又ヒラデルヒヤに帰り、同所に三日程逗留し、九月四日再びオスウィーゴの宅に帰着致し候……………」

当月六日より学校開業に相成り毎日七時間学校に出席致し居候。……………」⁹³

以上は1876年9月21日付の家族あての手紙の抜粋であるが、夏期休暇中の約2ヵ月間は、「翻訳及び旅行のために時間を費し、諸事に取まざれ」る日々を送ったのであった。

夏期休暇中の時間の大半を費したという翻訳について、伊沢修二は、つぎのように語っている。

「それは明治九年のことであったが、米国独立百年記念の博覧會がヒラデルヒヤに開かれた、丁度此時田中文部大輔は教育視察を兼ねて渡米せられ、其随行は阿部泰蔵、手島精一などの人々であったが、此時我々教育研究の爲め留学していた三名は、米国教育制度調査を囑託せられ、余はマツサチューセツ州の教育制度を調査し、それを翻訳して田中大輔に差出したが、その為に自分も教育制度の研究ということが出来、且つ此等の調査は十一年になって、米国学校法といふ書物として文部省から出版せられた。此中には神津君の紐育州教育制度の調査があり、又高嶺君も何所かと調べてそれが含まれておるのであって、教育制度は如何にすべきものかといふことに就き、我国人に有益なる資料となったと思ふ。」⁹⁴

1876年9月6日、秋期学期が始まった。この学期は、高嶺は、前学期と比べると、かなりの教科

を受講している。この学期の学籍簿をみると、欠席日数6、暗唱不足34、遅刻回数2、作文等での誤字3であり、欠席日数、暗唱不足、遅刻日数などは、前学期より多くなっている。その中でも暗唱不足と欠席日数が急増している。他の学生も、それらは増えているけれども、高嶺のそれらの増加は大きい。これは、受講教科が多くなったためであろうか。受講した教科は、地理教授法(89)、植物教授法(90)、読方教授法(×)、算数教授法(76)、数(87)、言語(83)、学校経済(96)、教育哲学(90)、実物(×)、動物(×)、道德教育(×)、色彩(80)、短文(93)、型・高き等(×)、形教授法(×)、創作画(×)、書方教授法(×)、遠近画(92)、唱歌(ex)等であり、受験した教科の平均点は87.6である。第1年次に比べると、教科の平均点がかかなり低くなっている。

1877年の春期の学期が始まる2月、高嶺は、つぎのような留学延期の伺を文部省に提出している。

「私儀明治八年九月以来オスウィーゴ師範学校にて修業罷在、全二ヶ年の後卒業仕免状受納の上帰朝致すべき心得に御座候處、当師範学校は他一般の師範学校と違ひ、各生徒小学校に行き二十週間の間実地に教授せざるものには決して卒業の免状を与へざる規則に御座候。扱此の実地授業の一條は、師範学科中の最要且つ最難なるものにして、当地の生徒と雖も最も難しとするところに御座候、況哉小生実地に英語を用ること僅に一年半余にして米国の童幼に英語を以て二十週間実地に教授を施すは、至難なる事にして、免状を受納すること無覚東御座候。依而条約第四条に基き、幸に二十週間即一期の延期を許さるゝことを得て、右二十週間を専ら実地教授に費し力を究て勉強仕時は、必ず来明治十一年二月には卒業の免状を得て快く帰朝致すべき事必然と存候。依て右二十週間の延期御許承相成候様此段相伺申候也

明治十年二月

一等属高嶺秀夫⁹⁴

高嶺も、伺文の中で指摘しているように、オスウィーゴ師範学校の教育の特徴の一つは、最後の学期で、20週間の教育実習が実施されることである。そのため、附属小学校(練習小学校)が、師範学校設置頭初から設置されており、高嶺が教育実習を受ける頃は、「初歩中等ノ二等トシ校内大約児童三百名ヲ容ルヘシ」とあるように、初級(3年)、中級(3年)の小学校があった。

教育実習をするに当って、高嶺が、何故、上掲のような弱気と思われる伺書を文部省に提出した

のであろうか。単に、留学延期のために、教育実習の難しさを挙げているとは思えない。彼自身、外国語での教育実習の難しさを実感として感じていたのであろう。以上のように重視された教育実習を中心とした第2学年後期の学籍簿は、つぎの通りである。

欠席日数3, 暗唱不足1, 遅刻回数1と、それらは、前学期より、かなり少なくなっている。そして、この学期の学籍簿で注目すべきことは、これまでの学期の学籍簿でなかった評価項目があることである。すなわち、質疑力(77), 几帳面(100), 統率力(80), 児童の敬愛を得る能力(85), 活力(83), 徹底力(85), 清潔(100), 沈着と落着き(80), 一般的技術(78), 仕事のまとめ方(85), 誤字(4), 実物(88), 道德教育(94), 動物(79), 批評力(90), 読方教授法(88), 形教授法(83), 大きさ, 高さ, 音(82), 幾何(74) 化学(×)などである。それらの中, 仕事のまとめ方までは、教育実習にかかわる評価項目であると思われる。他の学生の大部分は、それら以外の評価点はなく、それに対し、高嶺は、教育実習中でも、多くの教科を受講し、受験をしている。これは、高嶺自身、かなりの努力をしたが、英語力の弱さで、授業になかなか、ついて行けなかったのであろう。それが、教育実習前に、留学延期願を出し、その理由として、教育実習の難しさを挙げているのであろう。

種々の困難があったと想像されるが、高嶺は、1877(明治10)年7月3日、オスウィーゴー師範学校の卒業證書を得たのであった。

「此一紙は高嶺秀夫オスウィーゴーに設置せる新約克州立師範学校の定課英学初歩を満足に成業し且教授の法充分に実地経験せる事を証するによりて新約克州中何れの公立学校なりとも其教師たるべき免許を有するものなり

千八百七十七年七月三日

教育局長ニール, ギルモール

師範学校長イエス, セルドン

地方学務局長ギルベルト, モリソン⁹⁹

地方学務書記ゼケー, ポースト」

卒業後も、留学延期が認められ、アメリカ合衆国に留まる。そして、「師範学校卒業同年の夏期動物学校¹⁰⁰に入学して主に海産動物の構造・組織を研究し」た。1878年の秋期学期においては、オスウィーゴー師範学校で興味のある教科を聴講している。卒業した気の緩みか、欠席日数12と、これまでになく多く、暗唱不足6, 遅刻日数1である。受講した教科は、幾何、物理、上級修辞学

と作文、地質学と鉱物学等である。そして、受講していても、受験をしていない。さらに、1878年の「冬期休業中は、ニューヨーク州イサカ大学に於てドクトルワイルデル氏に就き動物学を修められたり。」と、言われている。

1878年2月には留学を終わることとなったが、若くて聡明な高嶺が、異文化に触れて、カルチャーショックを受け、多くのことを学んだことは言うまでもない。教育においても、そうであろうが、特に、つぎのようなことを学んだのではないのだろうか。

一つは、伊沢修二も語っているように、また、高嶺自身が、「米国の婦人は、大概多少の教育を受け、且自由の風に浴して、……各自由の気風を顯はし自然の性を伸べ、最も貴ぶべき有様なり¹⁰¹」と言っているように、女性が男性と同じように、はつらつと活動し、そして、同じ教室で、同じ教育を受けていることである。オスウィーゴー師範学校では同級生の9割が女性であり、同じ教室で、同じ教育を受けることは、当時の日本人としては、夢にも考えられなかったことであろう。

二つは、当時、アメリカ合衆国の教育界で耳目を集めていたオスウィーゴー運動の中心となったオスウィーゴー師範学校で、実物教授を中心とする教授法、それを実践するため、20週間の教育実習を体験したことである。そして、学校でばかりでなく、その運動の中心的な担い手のひとりであるクリュージイから、起居をともし、学んだことである。

以上の外、いろんなことを学んだと推察されるが、¹⁰²1878年3月16日、オスウィーゴーを後にし、往路を同じく、サンフランシスコを経て、帰国することとなった。サンフランシスコを去るにあたって、高嶺は、1878年3月30日付の手紙をクリュージイあてに投函している。¹⁰³この私信では、先ず、日本に飛んででも、帰りたい心境を述べ、ついで、帰国後、東京師範学校に勤めるべきか、モース(Edward Morse 1828~1925)の助手になるべきか、どちらを選ぶべきか、躊躇している旨を記している。そして、アメリカ合衆国へ、小学師範学科取調員として派遣された3人の1人である神津専三郎と同じ船で帰国する旨を伝え、神津の帰国後の日本での抱負を非難している。このことについては、神津専三郎のところで検討する。

以上のような手紙を投函して間もなく、高嶺たちの乗った船は、サンフランシスコを離れ、横浜へと向った。

(注)

- (1) 高嶺秀夫先生記念事業会 『高嶺秀夫先生傳』培風館 大正10年12月20日 40～41頁。
- (2) 同上書 39頁。
- (3) Krüsi H., Recollections of My Life, The Grafton Press, 1907, 234.
- (4) 前掲書『高嶺秀夫先生傳』 41頁。
- (5) 同上書 39～40頁。
- (6) (a) Historical Sketches Relating to the First Quarter Century of the State Normal and Training School to Oswego, NY, 1888, 135～144.
 (b) Biographical Dictionary of American Educators edited by John F. OHles Volume, 1978, 1174～1175.
 (c) 村山英雄著 『オスウィーゴ運動の研究』 風間書房 昭和53年 3月15日 95～110頁
 以上の3著による。
- (7) Historical Sketches Relating to the First Quarter Century of the State Normal and Training School at Oswego, NY, 1888, 132～134。
- (8) 前村克己「クリュージ」『教育人名辞典』理想社 昭和37年 2月20日 197～198頁。
- (9) 前掲書『オスウィーゴ運動の研究』 172～188頁。
- (10) 『教育雑誌』第14号 明治9年9月2日 13～33頁。
- (11) 前掲書『オスウィーゴ運動の研究』 307頁。
- (12) 高嶺秀夫先生記念事業会『高嶺秀夫先生傳』培風館 大正10年12月20 45～47頁。
- (13) 伊澤修二君還暦祝賀会『^{樂石}自傳教界周遊前記』明治45年5月9日 35頁。
- (14) 前掲書『高嶺秀夫先生傳』48頁。
- (15) 同上書 49～50頁。
- (16) 同上書 55頁。
- (17) 同上書によると、「先生が師範学校の課業の餘暇に進化論に関する著書を嗜読せられし事は前にも述べたり。」(55頁) とある。
 注(3)の本(252頁)にも同じことが述べられている。
- (18) この手紙では、「Vater Krüsi」あてとなっている。高嶺は、クリュージイを、第2の父と考えている。
- (19) モースは、1877年6月来日し、東京大学で、約2年間、動物学を教え、進化論を紹介したことと、大森貝塚発見で著名。高嶺は、モースの再来日の同じ船で帰国したことにより、モースと知り合ったとなっているが、高嶺のクリュージイへの手紙によると、乗船以前に、東京大学でのモースの助手となるよう依頼があったものと思われる。